特集 つながる力

コミュニケーションは生き残っていくために大切

人は社会の中でほんのかすかにでも何かとつながっていなければ生きていけません。すれ違うとき、電車の中で隣合わせになるとき、迷ったときに道を聞くとき、可愛い赤ちゃんに笑いかけたとき、誰かと共感する自分に驚いたりします。

一人で暮らす人たちが増えて、お互いが孤立してしまう、食べることも着ることも、住むことも満たされているけれど、気持ちを渡す人がいない。自立して人に迷惑をかけず一人で生きるのは正しいことかもしれないけれど、迷惑をかけ、かけられることも、時には必要なのかもしれません。

誰かに声をかけたい、気持ちを伝えたいと思ったとき、いったいみんなはどうしているのでしょう。話す力、聞く力をトレーニングするための、小さなきっかけを探してみました。

つながりが人を変える、”まち“を変える。

NPO法人・高齢社会の食と職を考える

チャンプルーの会

立川市のけやき台団地の商店街にレストランサラがある。高齢者向けに地元でとれた新鮮で安心な有機野菜を使い、素材のよさを活かす薄味で調理した料理が用意されているが、調理法は一律ではない。注文した人の体調や持病、注文に合わせて野菜の刻み方、肉や魚の煮方などを変えている。

だから、「サラの食事が命綱」と、毎日のように通ってくる常連さんが開店してすぐにでき、10年以上たって高齢者も利用しやすいレストランになっている。これは代表の紀平容子さんたちが開店前に約半年かけて高齢者と食事会をしてつながりを持って決めた個別対応の成果である。

レストランサラの外観

開店の翌年、NPO法人の資格を取った紀平さんたちは、レストランに来たくても来れない日にお弁当を届ける出前サービスを始めている。これも個別対応の一つで、3年目には事業化された。お弁当を届けると一人で暮らしている高齢者の中には、注文をつけたり、クレームをつけたりする人もいる。そんな時、スタッフは腹を立てたくなるが、「人と話したいんだ」と考えて話を聞くそうだ。

レストランに来られるのに億劫がっている人には「一度、来てみませんか?」と声をかける。足が悪くて来れないけど人と話したい人には、出張おしゃべり隊を派遣することもある。悩みを相談されたら、解決の手助けをしてくれそうな人を紹介する。好みそうな講座やイベントがあれば誘ってみる。

「だれもが、つながる力を持っているのだから、私たちは出会いの場をつくればいい。出会うことで人は変わる」と、紀平さんたちは考えている。

サラ おしゃべり会

たとえば、お弁当配達の責任者である80歳代の男性は、最初こそ企業社会とのギャップにストレスを感じたりあきれたりしていたが、今は「会社では出会えなかった人に出会えて楽しいし、勉強になる」と、言っている。

娘さんに勧められて1時間お掃除やお洗濯の仕事をレストランで始めた70代の女性も、やがて若いスタッフの潤滑油的な存在になった。今は足を骨折し、要介護3となって仕事を止めたが、チャンプルーの会が8年前に始めた介護保険事業デイサービスサラに通っている。

レストランサラで開店直後から、いつも一人で食事している常連さんで、声をかけると困った顔をしていた男性も、今は同じテーブルのお客さんに自分から声をかけるようになったとか。

レストランサラの「おみやげ」は、お金では買え難い人と人のつながり、なのだ。

同じ場所に居るだけで…感じるつながり

「子育て広場ハトの家 in きらら」

小川西町の野火止用水を渡ってすぐの東村山市に特別養護老人ホーム村山苑ハトホームがある。毎月第2、第4金曜日、ここで子育て広場が開催されている。この辺りは福祉施設や保育園が近在し、空が広くてのどかなところだ。

引き戸を開けるとそこが畳敷きの広場。切り紙でかわいらしく飾られている。すでに赤ちゃん連れの若いお母さんが2、3人座ってくつろいでいた。サークルではないのでここには来たい人が来たいときに来て、いたいだけいて帰る。ボランティアスタッフが安全安心を第一に、暖かく迎えてくれる。そして一段下がった奥のスペースがお年寄りの居場所だ。それぞれ〝いつもの場所〟があるようだ。

動いているのは元気タイプの赤ちゃんと介護士の方だけ。重度認知症のお年寄りの、静かにこちらの動きを感じている気配がする。お母さん方の声がその気配の中に溶け込んでいく。

昔からあった、子どもたちがこのような老人施設を訪問して歌を歌ったりプレゼントを渡したり、という交流とは多分異質だ。ここではそれぞれのくつろぐムードだけで互いの存在を認め合う無言のコミュニケーションになっている。

子育て広場は、ハトホームの主任の「老人施設は開放的で地域に根ざした場であるべき」という強い信念から生まれた。小平と東村山のNPO法人「子育て広場きらら」と「HUGこどもパートナーズ」の協働で始めて5年経つ。当初の、つい〝いいおかあさん〟を演じてしまうような緊張感はもうない。ゆったりした時間につつまれた安心空間だ。

子育て広場入り口

お年寄りたちは赤ちゃんが近づくと、「かわいいね」とニコニコ顔になる。

親睦バーベキュー大会を続ける自治会

うちの自治会は農地の中の新興住宅地にあります。袋小路の通りを真ん中に21世帯が住んでいます。入居時に音頭を取る人がいて自治会ができ、親睦を兼ねて年1回、お盆の頃にバーベキュー大会をしています。強制参加ではありませんが、なるべく多くの会員が参加できる日程を設定し、費用は参加する人が支払う会費制です。

毎年輪番制の役員世帯の男性が中心になって買出しに行きます。その続きで準備も男性がします。自治会内の各家庭が所有するパラソル、テーブル、バーベキューセットなどを自治会内の通路に設置し、時にはにわか雨にそなえて仮屋根もつけます。お昼すぎから夜まで続く会なので、途中で用事を済ませる人、塾に行ってきてからまた参加する子どもたち、部活の後や仕事帰りの人など、高校生・大学生・社会人になってからも参加するかつての子どももいます。近所の子どもたちの話を聞くのも、大人にとっては楽しいものです。

片付けの後は、子どもを中心に花火をします。家庭にある花火をそれぞれもちより、大人も楽しみます。楽しくゆる～くやっているから続いているんだと思います。

（大沼２５２５（にこにこ）自治会会員）

ゆっくりかわっていく

自治会は、地域住民によって自発的に組織される町内会。小平にもたくさんの町内会があるが、住民の高齢化や、個人情報の使い方の難しさなど、それぞれに事情を抱えている。

ここに紹介するのは、府中街道に近い50世帯前後の町内会。昔は道路が私道だったので、上下水道・電灯を町内会で整備・運営する必要があった。上下水道の品質管理・衛生管理・メンテナンスなど自治会は生命共同体だった。それゆえ、住人同士のきずなは強かった。

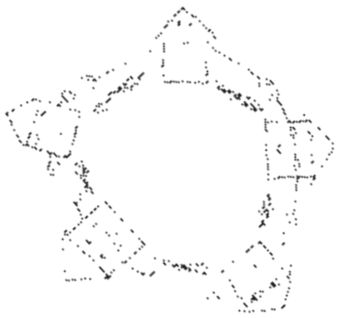
しかし、市道となり、市が管理するようになると、当初の結びつきが希薄になってきた。戸数は増加したが、高齢化は進み、平均年齢が70歳を過ぎ、一人暮らしの世帯が増えてきた。昨今の独居老人の悲惨な報道などを知るにつれ、みんながお互いに助け合う必要を感じ始めた頃、新しい会長が決まらない事態が持ち上がった。「臨時総会を開いたんだけど、そこでみんなが会長が決まらないんだってことに気がついたのはとても良いことだったのよ。」とやっと決まった今年の会長は言う。

相互に支えあうために会長がまずやったのは、5つの班に分けたことだった。回覧板をまわすのも班ごとなので、訃報のように急な回覧もスピーディーに回る。「班に分けたら、却って近所との付き合いが増えて楽しいって喜ばれました。」と、町内会の人たちにもまずまずの評価。昨年の会長も「急なお知らせのときには全戸にポスティングしてたので、コレだととても楽ですよね」

高齢者でも会長になれるように、「お助け隊」も結成した。これは、自分ができることを、例えばパソコンや、買い出し、イベント係、相談役などに登録してもらって、必要なときに会長が声をかけて助けてもらう制度で、予想以上の登録者が集まった。この体制がプラスになるか否かはまだ手探り状態だと言う。しかし、地域力につなげていけたらと。春にはお助け隊の中から自主的に懇親会もひらく予定があり、住民の意識はゆるやかに変わってきている。

「班の名簿を作るときに手伝ってくれる人を急募します、って電信柱に貼ったら、何人もの人が声をかけてくれて、少しずつ自分たちの町内会っていう気持ちがよみがえってきているんですよね」

小平に素敵なコミニュティがまたひとつ出来そうだ。



みんな誰かに伝えたい!! 私の気持ち『君に届け』

好きに選んでレジに並べば欲しい物が手に入り、分からないことは、人ではなく機械が教えてくれる。一人でいても退屈しないゲームもあるし、誰とも口をきかなくたって、日常生活に不自由はない。

そう、今は気持ちなんかちゃんと伝えなくても生きていくことは出来る。だけど、本当にそれで良いのかな?せっかくこの世に産まれたんだから、自分だけじゃなくて、もっといろんな違う人間のことを知りたくないのかな?同じ体温を持って、同じ形をした人間と話をしたくないのかな?自分が何を考えてるか伝えたくないのかな?

それができたら、きっと世界は大きく変わる、明日を待つ気持ちがわかるようになる。周りの人が好きになる。好きな人の話が聴きたくなる。そして時は飛ぶように過ぎていく。

人に話しかけるのが苦手なせいでいつの間にかクラスの浮いた存在になって、貞子なんて呼ばれていた爽子が、爽やかな男子に声をかけられたのをきっかけに、自分もみんなと同じように友達とおしゃべりしたり、学校帰りにラーメン屋によったり、いわゆる普通の高校生になりたいと、勇気を振り絞って「ちゃんと気持ちを伝える」。

少しずつ温かくなっていく周りの空気の中で、爽子は幸せをかみしめ、そんな爽子に触れて本当の誠実さに感動する。

日本中の淋しい若者達が「君に届け」といっているような、強い共感とメッセージがある。

椎名軽穂・著
（集英社）

声をかけて つきあう

社会福祉法人 つむぎ
障害者支援施設 おだまき
所長 岡田 眞人

「障害のある人とこう話したらよいです」というようなハウツーなどはない、というところが僕自身の考え方の基本です。別に正解はない。「まず声をかけ、付き合うことが大事だ」ということを伝えます。

小平の福祉を進める会JOINという会で十年前に、市の奨励学級の制度を利用して、コミュニケーション講座を開催しました。自分の気持ちを大事にするアサーティブトレーニングを実習し、障害をもったトレーナーを含めて、障害のある人も、ない人も一緒に参加して考えるという会になりました。障害を持つ彼らは「いやだ」ということが言えない。親切にされる優しさを拒否できない。いい人でいなければいけない。露骨に差別をされ、否定されたときにも「ばかにするな」と言うこともできずに、黙って、こもっていました。講座では、自分も相手も気持ちが言えるような環境が大切だということを学びました。

僕自身は福祉の仕事で飯を食っているという意味で、福祉のプロであることに違いないのですが、プロとか何とか言う前に同じ人間である。コミュニケーションなんかとれずにおろおろ、うろうろして悩んでいるのが正直なところです。人と人の出会いがあって、それはいつも難しくもあり、面白くもあります。

小平あんしんネットワークというグループを作り、防災の問題に取り組んで、「障害のある人との接し方体験」も実習しています。避難訓練の、ワークショップでは、子どもと、車椅子の人や、視覚障害者に参加してもらい、子どもが、障害を持つ人に『トイレに連れて行って欲しい』と声をかけられたときにどうするか。自分で考えてもらって、思うようにつきあってもらいます。

子どもと障害のある人に感想を言ってもらったあとで、車椅子の押し方や視力障害の人への声かけはこうするといいです、という説明をします。わからない時は、障害のある本人に聞いてほしいということも伝えます。

時間があるときは、障害のある人から、たとえば地震がおきたときに逃げられない不安、避難所でうまく暮らせるかなどいろんな不安を持っていることも話してもらいます。

障害のある人の気持ちがわかれば、つき合い方も自然に分かってくるのではと思うからです。

あまり肩肘張らずに、楽な気持ちでおつき合いできるようにならないかな、と思っています。これは、子どものワークショップですが、見ている大人にも伝えたいのです。

【おだまき】
電　話　042-346-4530
月～金　9時～17時

肢体障害、視力障害、身体障害、聴力障害、知的障害や精神障害を持つメンバーが通っています。元気村の作業所の他に一橋学園におだまき工房があります。年齢も20代から70代まで幅広く、様々な人たちが協力し合い機織りや染めの作業を中心に行っています。

小平市男女共同参画推進条例の基本理念

男の人も女の人も、みんなかけがいのないひとり

第３条に「男女の個人としての尊厳が重んぜられること、男女が性別による差別的取り扱いを受けないこと、男女が個人としての能力を発揮する機会が確保されること、その他の男女の人権が尊重されること。」そして「社会における制度又は慣行が、性別による固定的な役割分担等の意識を反映して、男女の自らの意思による多様な生き方の選択に影響を及ぼすことのないよう配慮されること。」が定められています。

こうしたことが実現すれば、人とのつながりができて、私たちは幸せに生きてゆけるのですが…。

募集

広報誌『ひらく』の企画・編集をしている小平市男女共同参画推進実行委員の募集は４月５日号の市報をご覧ください。

『ひらく』の書棚

小平市男女共同参画センター“ひらく”にある本の紹介です。本は借りることができます。

『女性を活用する国、しない国』

竹信三恵子・著
〈岩波書店〉
500円＋税

豊富なデータで示されるのは、未だ女性を活用しきれないこの国の現状だ。「だいぶ改善されたのでは?」は、錯覚にすぎない。政治、経済、教育など各分野で、諸外国に比べ断トツに遅れている。

女性の活用が進む国は、経済も活性化されるという。日本が失われた20年をもがく間に、女性活用の国際競争が起こっていたのだ。

昨今の厳しい状況の突破口になるのは、女性の活用促進しかない。男女共同参画こそ、一縷の望みに思えてくる。

『女ぎらい ―日本のミソジニー』

上野千鶴子・著
〈紀伊国屋書店〉
1、500円＋税

私たち、日本人の意識の奥にあるミソジニー（女であることを嫌う感情）を数多くの事例をあげて様々な角度から分析している。

書かれている事例は、日常、何気なく見たり聞いたりしていることなのに、それが男の「女性蔑視」の事例だったり、女の「自己嫌悪」の事例だったりする。読んでいると、驚き、戸惑い、著者の見解を受け入れることへの抵抗感が襲ってくる。

著者はそんな読者の気持ちを知っていて敢えて、ミソジニーが性的な差別のない社会を作る道を妨げている現実に私たちの目を向けさせようとしているのだ。

「知ることで人は変われる」という著者の強い思いが伝わってくる。

『確かな説明力をつける本』

永崎一則・著
〈PHP研究所〉
1、100円＋税

人間の不幸はお互いにわかり合えないための不信感から起こることが多いと言われています。「わかり、わからせる」ことを妨げる壁を探り、そのための対応力をつけるには、どうしたらよいか、誰でもできる実践的な方法が提示されています。

合理的なトレーニングを重ねさえすれば、誰でもわかりやすい上手な話ができると、65年にわたって話し方の研究をしてきた著者は語っています。

『デンマークの高齢者が世界一幸せなわけ』

澤渡夏代ブラント・著
〈大月書店〉
1、700円＋税

デンマークは福祉国家で有名な国だ。「必要な人に、必要なとき、必要なだけ無料で援助」が受けられるので、一人暮らしの高齢者は困らない。すべて民主主義の成果だと言う。

戦時中はナチスに占領され、レジスタンスも強制収容所生活も経験したデンマーク。戦後、学生運動や女性解放と男女同一賃金を求めるレッドストッキングという女性運動を経験した。憲法を守りながら、他の人の発言に耳を傾け、自分の考えを表現し、意見を同じくする人たちと行動するうちに「自分のことは自分で決める」ことを勝ち取っていったようだ。『少子化をのりこえたデンマーク』（湯沢雍彦・著 朝日選書）を併せて読むと「世界一幸せなわけ」がもっとわかる。

『単身急増社会の衝撃』

藤森克彦・著
〈日本経済新聞出版社〉
2、200円＋税

「日本には1446万人が単身世帯を形成しており、全人口の11.3％全世帯の29.5％にあたる」、一章の数字の中に、今の日本が置かれている状況が鮮明に表われている。

日本の全世帯のおよそ3割が単身世帯で、10世帯のうち3世帯はお一人様。しかも、この数字は2005年の国勢調査の結果だから、去年行われた5年後の調査結果では、更にお一人様が増えることが予測される。

なぜなら、単身世帯よりかろうじて0.4％多い「夫婦と子どもからなる世帯」の内訳が、私たちが常識でイメージする「働く親と未成年の子ども」という形は6割で、残りの4割は「夫婦と成人した子ども」。現在の出生率の低さを考えれば、この6対4の割合も、次の国勢調査の結果では逆転するに違いないからだ。確かに、自分を含めて、近しい人たちを思い浮かべても、同居している子どもは20代になっている。しかも若者の未婚率は上がっている。

ではこの数から読み取れる現実をどうしていくのか。家族の単位がどんどん小さくなっていく社会で、人間は生き残っていけるのか、著者は、その対応を公的ネットワークの拡充と、地域コミュニティーによる助け合いの2つに絞って提案している。

数字が数字でいる間はものは動かない。しかしそれが呼吸し、しゃべり始めた時数字は人々に大きなインパクトを与える。そういう意味で、表と統計と、折れ線グラフだらけのこの本は強く警告している。「お互いに助け合う気持ちがなければ展望はない」と。

平成22年度『女と男の参画講座』の報告

第4回（2011年2月19日、中央公民館視聴覚室）

『夫婦のいいコミュニケーションづくりのために』

講師　関口　久志さん
（京都教育大学准教授）

小平市男女共同参画推進実行委員会が平成10年から企画、実施している「女と男の参画講座」。今年度は、4名の男性講師をお招きして、お片づけ、竹トンボ、ボランティア、夫婦の会話、「けばすぐに「やってみよう！」と思えることをお話いただきました。

男性の応援団になりたい、という関口さんは、大学での講義や各地で行う講演会などを通して、男性が生きたい自分を生きていく力をつけるための方法を教えていらっしゃいます。今回の参画講座でも、「夫婦のいいコミュニケーションづくりのために」男性ができること、しなければならないことを話されました。

コミュニケーションづくりというと、上手な話し方や聴き方を身につけることを考えがちですが、関口さんによると、自分の居場所、生きたい自分でいられる場所を獲得することだそうです。この点で、弱みを見せるのがカッコ悪いと考えがちな男性は、コミュニケーションづくりがへたです。

性行為は本能ではなくコミュニケーション力、と考える関口さんは、性行為を嫌悪する、逃避する男性の急増、夫婦間のセクスレス化が進んでいる現実を踏まえて、若者男性のコミュニケーション力低下を指摘されました。夫婦の場合、夕食を共にする回数と性行為の回数は比例するのだそうです。

では、夫婦のいいコミュニケーションはどうすればできるのでしょうか？ 正解はないとしたうえで関口さんは、別れる力が大事、と話されました。別れが来ても受け入れられる力です。自立できる力ということでしょうか？

▲第1回（2010年12月4日、男女共同参画センター「ひらく」）

親子でお片づけ！ぼくの手、わたしの手でおうちをきれいに

講師　三木　智有さん
（tadaima! 代表）

「何のために片づけるの？」講師の三木さんの問いかけに、大人も子どもも暫し頭を悩ませました。こんないいことがあると納得するのは確かに大事。こうなったらいいと具体的にプランを書いて片づける。頑張った自分にご褒美を準備する。15分で1クール。うん、これなら片づけられそうです。

▲第2回（2011年1月22日、男女共同参画センター「ひらく」）

昔遊びの竹トンボで誰でもイクメンになれる！

講師　堀池　喜一郎さん
（どこ竹@竹とんぼ教室代表幹事）

講師の堀池喜一郎さんは“どこ竹”の主催者で、設立後3年間で200人のリーダーが7500人の子どもと交流する場を作ってきた人。その経緯を聞いた後、作り方を教わり自分の竹とんぼを作って屋内広場へ。飛ばし方を教わって遊び始めると、シニアも子ども長距離飛ばしに夢中。昔とった杵柄のシニアに、子どもは憧れのまなざしを向け、シニア世代と孫世代とが自然に交流していました。「遊び」の力で繋がった場は楽しい！の一語でした。

手作り竹とんぼ

▲第3回（2011年1月29日、男女共同参画センター「ひらく」）

地域の学芸員に学ぶ子どもといっしょに楽しむコツ

講師　高橋　英久さん
（江戸東京たてもの園学芸員）

子どもボランティア「ひじろっこ」100名と大学生から90歳までの大人ボランティア「ひじろ会」200名近くが地域に密着した活動をしています。「ひじろ」は囲炉裏。ひじろに集うという意味を表わします。世代を超えてたくさんのボランティアが集まるのは、学芸員と共に江戸丸風雲城を作っての陣取り合戦、江戸野菜づくり、風車づくりなどの遊びを創り出すことにコツがありそうでした。

ひらく広場

原稿をお寄せください

ひらくの記事や表紙の感想、その他なんでもOKです。原稿（500字以内）には〒、住所、氏名（ふりがな、原稿掲載は匿名・イニシャル可）、年齢も書いてください。採用された原稿は文意を変えずに短くする場合があります。

あて先／小平市小川町二丁目1333番地
小平市次世代育成部青少年男女平等課
「ひらく広場」係　FAX 042-346-9200
byodo@city.kodaira.lg.jp

ひらく編集室はあなたにひらいています。

「大人のためのお話し会」に参加して…

「心を空っぽにして聞いてください。」近所の図書館の一室にロウソクの灯りがともされ、「大人のためのお話し会」が始まった。

お話し会は、読み聞かせとは違う。語り手さんは、本を読むのでなく、集まった人達の目を見て、物語を直接語り聞かせてくれる。照明も音響も、舞台もない。薄暗い部屋には、語り手さんの声だけが響く。

初参加の私は、最初どうにも落ち着かなかった。話に集中できず、物語の世界に入っていけない。「帰りに納豆買っとかなきゃ」なんて雑念が浮かぶ。無心になるって、こんなに難しかったかしら。幼い日、枕元での母の話に、あんなに夢中になったのに。

愕然とした想いと焦りの中、耳に意識を集中した。すると、いつの間にか退化した想像の翼は、元通り快復。言葉は、語られるそばから鮮やかな映像となり、頭のスクリーンに映し出される。語り手さんの道案内で、古今東西の物語の世界を旅することができた。

それは、映画よりも映像的で、ジェットコースターよりもスリリング、読書よりも人との絆を感じられる、温雅な体験だった。

必死になって空っぽにしたはずの心は、帰り道、不思議と温かいもので満たされていた。

（伯楽）

20分の散歩

今日も息子と小金井公園を散歩してきました。わずか20分の散歩。でも冷たい手足がいつの間にか暖かくなり、体が軽くなります。広い公園で新鮮な空気を吸い、青空を見上げると「頑張るぞ」と勇気が湧いてきます。週に1、2度ここに来るようになって半年。すぐ近くに住んでいながら以前は年に数回来るだけでした。もったいないことでした。

小金井公園に初めて来たのは小学校の遠足。もう47、8年も前のこと。当時は武蔵野郷土館というものがあり、大昔の生活道具などが展示されていたように思います。また、竪穴式住居などがいくつもあって、不思議な空間でした。初めてデートしたのもなぜかこの公園。桜の季節にこの公園を歩きました。青春のほろ苦い思い出が甦ります。

月日が流れ、私には3人も子どもができました。でも人生は想定外の出来事だらけ。山は越えても越えてもまた現れます。時折くだけそうになる心。でもこの公園を歩く20分だけは不思議と穏やかな心に戻れます。訳あっての散歩。訳があるからできる散歩。何かが変わると信じ、また来週もこの公園を歩こうと思います。

（平野芳子）

ばばの実感

娘が出産して私もばばになった。一ヶ月たつが未だ実感がない。むしろ睡眠不足で青い顔をしている娘をサポートするため母親として、しっかりしなくてはと思っている。小さな女の子が登場してからの日々はあっという間に時がすぎる。最も嬉しかったのは二人でゆっくり語り合えたことだ。眠っている赤ん坊のそばで私が昔の苦労話をすると、彼女は幼い頃の顔になり、好きだった絵本の話をしてくれた。私が選んだ本をずっと覚えていたことに感動！

何か食べたいものがあれば作るよ、と言う私への答えは、さつまいものきんぴら。素朴な味のお惣菜だ。意外な注文が嬉しい。そんな私はやっぱりばばになったらしい。

（ぴょん子）

圧巻のフルート演奏

先日、友人に誘われて初めて、フルートのコンサートに行きました。ブラジル音楽を中心とした、大久保はるかさん率いる女性のフルート奏者四名のアンサンブルは圧巻でした。

会場にブラジルからのお客様がいらっしゃる予定で用意されていた、美空ひばりの「川の流れのように」の曲がとても良かったです。ブラジルで一番愛されているといわれる日本の曲だそうです。楽器だけの演奏で歌は入りませんが、国境を越えて愛される音楽の魂というものが感じられて、目尻が濡れてしまいました。

帰りに購入したCDも良かったので紹介したいです。シューベルトの「アヴェ・マリア」など、誰もが知るクラシックの名曲が大久保さんによって、ボサノヴァ・サンバにアレンジされています。思わず、体でリズムをとってしまう不思議なCDです。

（塚瀬ゆかり）

小平在住、在勤の女性を訪ねて、
そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。

いきいき
レディ26

地域と自然に根ざした生き方

川島　喜恵さん
（小川町在住）

◆自給自足の子ども時代

川島さんは、結婚と同時に小平市に住み五十余年。間もなく傘寿になる。

茨城県の実家では、子どものころ、米、小麦粉、味噌、納豆、醤油、綿、絹、織物、着物などすべて手作りの生活であった。「私も機織りをしましたよ。母に織ってもらった着物を今でも大事に着ています」と語る。

◆何でも作ってしまう

現在は、味噌、たくあん、干し柿、石けんも手作りである。編物、和裁、洋裁も学ばれ、着物を自分で縫い、お孫さんのデザインしたセーターを編み、自分で作った洋服を着ている。

「針を持っているときが一番幸せ」という川島さんは、豪華な吊るし雛を作り、ひな祭りには飾っている。物は買わないで、大事にする。捨てない。タオルを重ねて縫った足ふきを保育園に贈り続け、十年になる。

◆公民館活動も生活の一部に

十数年前から、近所の上宿公民館を利用し、園芸、話し方、手芸のサークルで学んでいる。夏は公民館の草むしりに毎日通う。

川島さんはいつも、話し合いの場では、自己主張することなく、仲間の意見を黙って優しく見守っている。決まったことには、率先して働く。「団体生活は協力だよね」協力を惜しまない。

自分が言われて嫌なことは人には言わない。否定的な言葉を一切使わない。

サークルで話し方を学び、「私、聴きべタなのよ。聴き上手とは、聴くのが7、話すのが3という割合がよいと教わったけど。7ぐらいしゃべっちゃうのよね」という川島さんは、いつもにこにこしながら人の話を聴いている。

◆健康な身体に生んでくれた両親に感謝

川島さんの優しさは、家族だから、他人だからと分け隔てることがない。目の前の人を大事にされている。

「もし、主人が亡くなったら、お部屋を解放して、お茶飲み場にしたいの。お茶を飲んだり、お食事を作ったり…」

生き生きとした日々を送っているその源は？と尋ねると、

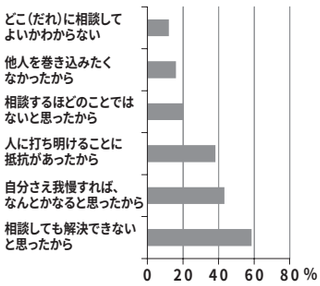
「親からもらった健康な身体に感謝しています」と語られた。

〔手先が器用な川島さんの作品〕
うさぎとねこ

相談しても解決しない、と思っていませんか？

昨年8月に内閣府男女共同参画局が発表した『地域における相談ニーズ調査報告書』によりますと、国民の10人に8人が「この1年間に悩みや困りごとがあった」と答えています。そして10人に6人は「悩みや困りごとを解決できずにひとりで抱え込んだ経験がある」と答えています。

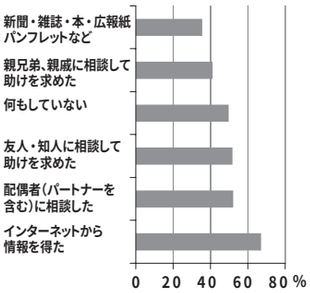
抱え込んだ悩みや困りごとの内容を尋ねると、「仕事、雇用、転職、再就職、起業など」が46％でトップ。続いて「恋愛、結婚、離婚、夫婦の関係など」「健康、病気、障害など」「メンタルヘルス、ストレスなど」「家計、借金、相続など」「友人、知人との関係や職場の人間関係など」です。



●悩みや困りごとを抱え込んだ理由

抱え込んだ理由を聞くと、「相談しても解決できないと思ったから」と諦めている人が58％もいました。次いで「自分さえ我慢すればなんとかこのままやっていけると思ったから」という人が43％、「人に打ち明けることに抵抗があったから」という人が38％。

ですから、悩みや困りごとを解決するために行った行動を尋ねると、3人に1人は「インターネットから情報を得た」と答えています。「配偶者（パートナーを含む）に相談した、助けを求めた」人、「友人、知人に相談した、助けを求めた」人は4人に1人ですが、「何もしていない」人も4人に1人います。



●悩みや困りごとを解決するための行動

では、悩みや困りごとをひとりで抱えこんでいるとき、ほしいものは？と聞くと、3人に1人が「情報」を挙げていますが、「話し相手」や「同じような悩みを持った人同士が語れる場」を挙げる人が同じくらいいます。

インターネットで情報を得たとしても、人とのつながりは欠かせないんです。

ひらく掲示板

表紙作品

『10008』（6.1×7.7×4.5cm 2010年 磁土）

美術家 さかぎしよしおう（学園東町在住）

石膏で作品をつくっていたさかぎしさんが、磁土と出会ったのは1997年のこと。以来、くる日もくる日も土をいじり、"磁土でつくった泥水を、一滴一滴、積み重ねて焼く" という方法にたどりつく。

当初、作品は白色だったが、そこへ青色が混じり、やがて作品の側から「みどり」という声が聞こえてきて、最近の作品は古木の繁りのようなこの深い緑色である。

撮影は「武蔵野の一本榎」で有名な熊野宮の、樹齢三百年ともいわれる夫婦欅（けやき）の根もとで行われた。2本の大樹の根は、眼に触れない地下ではどんなことになっているのだろうか、ともかくも生かし合うことなしに立ち続けることはかなわなかったはずである。その「仲良しぶり」にあやかろうと、おとずれる参拝者がおみくじを次々と幹に結んでいく。

じつは、さかぎしさんを知ったのは17年前にさかのぼる。結婚した相手の小机の引出しから「さかぎしよしおう」という印象的な名をもつ作家の展覧会を知らせるDMが出てきた。遺跡のような「大きな何か」の一部分であるかのような白い造形物。市内在住と耳にしたのは2年前のことだった。結婚相手は逝って7年が過ぎた。昨年末、なにか「今だ」という感じがあってさかぎしさんを尋ね、表紙への作品提供をお願いした。明けて静かな正月に、撮影がはじまった。（わ）

夫婦欅の堂々とした枝振り

撮影協力：熊野宮（仲町）

トピック

男性職員が育休をとる

小平市役所で2人目になりますが、次世代育成部の男性職員が2週間の育児休業を取得したことがわかりました。育児休業制度利用を決心させたことの中に部長の声かけがあったと聞いています。制度はあるがなかなか男性の利用が進まないという現実があります。だからこそ、少しずつでも広まっていってほしいと思います。

小平の情報はココでわかる

児　童　課	042－346－9821
青少年男女平等課	042－346－9618
男女共同参画センター“ひらく”	042－348－2112（青少年センターと兼用）
子育て相談 女性相談	042－345－2416 042－345－2415
子ども家庭支援センター	042－348－2100
ファミリー・サポート・センター	042－348－1780
NPO法人子育て広場「きらら」	042－453－2525
こだいら就職情報室	042－344－1215
中央公民館	042－341－0861
市民活動支援センター	042－348－2104
こだいらボランティアセンター	042－346－1424
社団法人小平市シルバー人材センター	042－344－2120

＊冊子「子育てガイド」は児童課、青少年男女平等課、健康センターなどに置いてあります。

いちど来てみませんか？

小平市男女共同参画センター

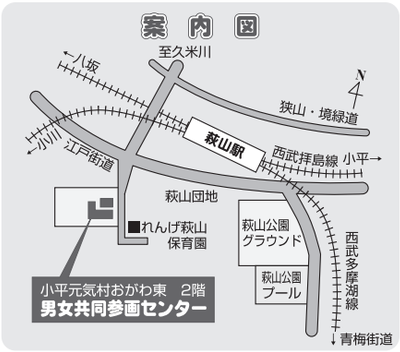
ひらく

（愛称）

小平市男女共同参画センター

〒187-0031 小平市小川東町4-2-1
小平元気村おがわ東　2階
042-348-2112（青少年センター兼用）
西武拝島線・西武多摩湖線　萩山駅南口より徒歩5分
※駐車場に限りがありますので、車での来館はご遠慮ください

●開館時間　午前9時～午後10時
●休館日　火曜日・年末年始・奇数月の第2日曜日
●利用対象者　利用登録団体・個人
●問合せ先　次世代育成部青少年男女平等課
042-346-9618



行ってみました　女性と仕事の未来館

正面アプローチ

ここはHirakuさんが男女共同参画に関わって以来、一度は行ってみたいと思っていた場所です。折しも世間で評判の事業仕分けにあって困っていると聞きました。厚生労働省の管轄ですが、（財）女性労働協会が事業委託を受けています。Hirakuさんは、担当者への取材も含めて女性と仕事の未来館で一日を過ごしました。

◆ある日の女性と仕事の未来館

9:30　開館。JR国分寺駅から1時間半、田町駅西口下車徒歩3分の位置にあります。入館者数1日平均675人。男女雇用機会均等法の視点と女性の参政権獲得の道筋を表わす場所として開館し、目的は全国の働く女性に関するすべてを支援することです。

10:00　図書室にあり全国から集めた労働関係の資料は貴重なものです。Hirakuさんは図書カードを作りました。申請書に現住所がわかるものを添えて提出すると、その場で発行されます。

10:30　1階の掲示板には様々なイベント企画ののポスターが貼ってあります。高校生・大学生対象企画やNPOとの共催もあります。職場の対人関係、頭痛の治療法、こころが軽くなる講座に貼ってある満員御礼の札を見て、働く女性の現実にHirakuさんはため息をつきました。

11:00　3階には女性のあゆみ展示があります。計画段階からあった「女性の歴史と未来館」構想を具体化したもののようです。

12:00　Hirakuさんは大通りに客寄せの立て看板が出ているのを発見。地下のイベント会場で時々開かれているランチタイムサロンです。女性の発表の場として未来館が個人や団体に場所を提供しています。今日は若い女性医師による「病気になりにくいからだづくり」。昼休みの人が三々五々集まり、中には男性もいました。未来館は女性も男性も利用することができます。

13:00　館内のレストランで昼食。玄米が選べる自然食のお店です。夜はビールが出ます。

書店では分類がまちまちで探すのに時間がかかる本もここではすぐ見つかる

13:30　午後からは起業セミナーや厚生労働省主催の社会福祉に関する講演会があり、人々が続々と建物の中へ入ってきます。男子正面アプローチ高校生の姿も。

14:00　館内の目立たないところに相談室があります。この10年間に法整備が進み、働く女性は珍しくなくなりましたが、働く場で女性たちはいきいきとしているでしょうか。働く場はどうしても男性中心になりがちです。その結果、セクハラ、パワハラ、育休切りなど深刻な問題が起きて相談件数も増えるという説明を聞きました。誰もが困った状態になってもおかしくない状況です。平成21年度の相談件数は5,300件。電話とメールによる総合相談で解決できないものが特別相談で面談となります。様々な問題が複雑に絡み合っていて、ハローワークでの対応は難しいとのこと。「そういうところに未来館の必要性があります」と担当者は強調しました。

17:00　パソコン内にあるシュミレーションゲーム「再就職のための自己チェック」（15分）を体験。パソコン端末は計11台ありますが、プログラム視聴限定で書類作成やインターネットはできません。図書室内のパソコン2台ではインターネットができますが、印刷はできません。Hirakuさんはパソコンを普通に利用できたら便利なのにと思いました。

18:00　会社帰りの人たちが立ち寄ります。館内の椅子のあるところはほぼ埋まっています。定年後らしい女性も男性もお互いの笑顔を確かめ合って丸テーブルを囲みます。人間らしく働いて定年後も未来館でたまには集まって話し合う。Hirakuさんはそういう風に人とつながって生きていきたいと思いました。

21:00　閉館。駅に近く安価なためか夜間の部屋利用も多いと聞きました。未来館の予算は開館当初の1/2に減額されましたが、入館者は2倍です。費用対効果で言えば、こんなに効率的な事業はありません。でも、仕分けにあってしまう現実があります。「こういう場所はあちこちに必要なのに」とつぶやいて、Hirakuさんは首をかしげながら帰っていきました。（平成23年3月31日で閉館します。）

女性と仕事の未来館
◆場所：〒108-0014 東京都港区芝5-35-3
◆ＨＰ：http://www.miraikan.go.jp
◆電話：03-5444-4151
　FAX：03-5444-4152
◆火曜～土曜9:30～21:00　日曜9:30～17:30

編集後記

ワーク・ライフ・バランス、イクメン・プロジェクトとか、男女共同参画推進は男性の問題になってきた昨今だが、女性の問題が解決したわけではない。参画することに女性がますます意欲的になってほしいと思う。（き）

最近、いろんなとこで「つながる」と言う言葉を見ます。流行り物は好きじゃないけどみんな誰かと、ほんのちょっとでいいからつながっていたいんだよね。（ｓａ）

ピアノの調律予算が削られた未来館。削減した人は、女性と「仕事の未来」を考えることはできても、「女性と仕事」の未来を考えることができなかったのだと思う。（ゆ）

ひらくはココにあります。

男女共同参画センター“ひらく”、公民館（11館）、図書館（11館）、地域センター（18館）
福祉会館、総合体育館、児童館、健康センター、市役所1F・2F、東部・西部出張所、郵便局（17か所）
市内各駅（7か所）、八坂駅、萩山駅、東大和市駅

小川町　多加楽、手作りクッキーの店歩、商工会館、JA東京むさし、コーヒーロッジベル
小川西町　佐野商店
小川東町　ギャラリー青らんぎ、長江宴、ブレッドファクトリー510、カフェAir（エール）
上水本町　アトリエ・パンセ
津田町　ハタエコンサーン
学園西町　ビューティーサロンサンローズ、百の豆木、梁里館、美容室ヘアーグラシュ、鈴木小児科、本間歯科
ヘアーサロンサンライズ、あかね薬局、床屋のけんちゃん
学園東町　日本堂文具店、梅の里、アクティブスタジオ、りそな銀行小平支店、グエン・バン・カフェ
おだまき工房、カシュカシュ、お化粧のしのざき、きそ歯科クリニック、ふく歯科、寝具センター丸新
ミサワホームイング一橋学園店
美園町　多摩済生病院、ラグラス、珈琲の香、POEM、永田珈琲、ルネこだいら、小平駅前クリニック
御幸町　ケアタウン小平
鈴木町　和菓子の玉川屋、きらら はうす
天神町　公立昭和病院、カフェテリアヴェルデ、ヘアーサロンひろ
大沼町　ガスミュージアム
花小金井（しんしゃ）　上原薬局、風のシンフォニー、辰砂